

血液型ステレオタイプの活性化が選択的情報使用と 印象形成に及ぼす影響¹⁾

篠崎 博美・藤島 喜嗣

Effects of blood-typical stereotype activation on selective information processing and impression formation

Hiroshi SHINOZAKI and Yoshitsugu FUJISHIMA

Previous studies have suggested that when stereotypes are activated unconsciously, the person is unable to consciously control them. The possibility that unconscious activation of blood-type stereotypes leads to the selective processing of stereotype-consistent information resulting in the formation of stereotypical impressions, regardless of the degree of belief in blood-type personality theory was investigated. Female undergraduates (n= 41) participated in an experiment in which they were subliminally presented with Blood-Type-A, B, or neutral stimuli, read an ambiguous scenario about a target person, and performed a memory task and an impression formation task. Results indicated that participants that were subliminally presented with Blood-type-B stimuli, retrieved information consistent with stereotypes about individuals with Blood-type-B, more often than participants in the other conditions. Conversely, subliminal presentations did not influence impression formation. The implication of automatic activation of blood-type stereotypes and the difficulties in conscious control are discussed.

Key words : blood-typical stereotypes (血液型ステレオタイプ), stereotype activation (ステレオタイプ活性化), selective information processing (選択的情報使用), impression formation (印象形成)

問題

私たちは、他の人や自分のことについて考えるときに、先入観や偏見にとらわれた考え方をしてしまいがちである。ある特定の社会的集団やそのカテゴリーの人たちが共有して持っていると考えられる固定化されたイメージ、一般化された信念や期待をステレオタイプ(stereotype)、特定の集団やカテゴリーの人たちに対して抱く否定的感情を偏見(prejudice)という。さらに、複数の人物からなる集団にまとめて1つの印象を形成することをステレオタイプ化(stereotyping)という。ある特定集団に対する印象にあてはまる人もいるかもしれないが、当然、あてはまらない人もいる。ステレオタイプをあてはめて判断するということは、個々人の特徴を考慮せずに相手をみてしまう

こととなる。

ステレオタイプは様々存在する。例えば、職業ステレオタイプは、「セールスマンは押しが強い」といった、特定の職業に関する固定化されたイメージである。また、人種ステレオタイプは、白人が黒人に対して抱いている「暴力的で敵意的である」といった固定化されたイメージのことを指す。日本では、ABO式血液型によって性格が違ふという信念が普及している。各血液型には、その血液型をもつ人々が共通にもっている多くの人が信じている傾向があり(佐藤, 1994)、血液型ステレオタイプと呼ばれている(詫摩・松井, 1985)。例えば、「A型の人には神経質だ」「B型の人には飽きっぽい」などである。これは日本固有のステレオタイプで、心理学的には根拠のないこととして否定されている。

自動的活性化

事前呈示するなどして活性化させられた概念は、印象評定などに用いられやすくなることが示されている。この効果は、アクセシビリティ効果と呼ばれている。例えば、Srull & Wyer (1979) では、実験参加者に、単語並び替え課題によって敵意性に関わる特性概念を活性化させた。その後、別実験とされた印象判断課題において、両義的で曖昧な人物プロフィールを読ませ、印象評定を行わせた。その結果、この実験参加者は、敵意性概念を活性化しなかった実験参加者と比較して、対象人物に対してより敵意的であると印象評定した。このアクセシビリティ効果をもたらす事前呈示は、閾下であっても有効であることが示されている (Bargh & Pietromonaco, 1982; 池上・川口, 1989)。ステレオタイプには、カテゴリーに関する手がかりがあると自動的に活性化してしまうという特徴がある。このため、私たちが意識的に抑制しようとしなくても、他者をステレオタイプ化しやすくなると考えられる。

ステレオタイプに関わる知識の自動的活性化に注目し、これを統制された情報処理過程と分けて理論化したのが、Devine (1989) の分離モデル (dissociation model) である。Devine (1989) は、ステレオタイプの知識と個人的信念の差に注目している。ステレオタイプの知識とは、社会に一般的に普及しているステレオタイプに関する知識のことで、文化的ステレオタイプとも言い換えられる。私たちは、妥当性を批判的に検討できない幼少期に、養育者や周囲の環境からこの文化的ステレオタイプを獲得していく。文化的ステレオタイプは、幼いころからさまざまな状況で活性化が繰り返されるためにネットワークの各知識の連合が強固になり、特定の手がかりが存在するだけで自動的に活性化し、処理されやすくなる、と考えられている。

血液型ステレオタイプでは、多くの日本人が各血液型の特徴について知識のネットワークを形成している。その形は人によって異なっているが、よく用いている人ほどネットワークの各概念が強固に結びついている。血液型に関する手がかりが環境にあると、特性や行動に関するステレオタイプの知識がイメージとしてすぐに活性化すると考えられる。例えば、血液型性格判断を信じ、頻繁に用いている人は、初対面の相手に「私はB型で

す」と告げられると「B型」という概念が自動的に活性化し、B型に関係する周囲の概念にも活性化が伝播してくる。このため、B型の特徴に一致する形で自動的に判断してしまう可能性が高いと考えられる。

意識的な適用抑制

一方で、Devine (1989) は次のことも指摘している。私たちは、教育や自らの成長の過程で、文化的ステレオタイプや偏見を否定する価値観を個人の中に形成している。この個人的信念は、ステレオタイプを想起するか否かに関わる知識で、統制された過程に従う。つまり、人は、自動的に活性化しやすい文化的ステレオタイプを持っているが、後から形成された平等主義的な個人的信念にもとづき、時間をかけ努力をすれば意識的にステレオタイプ化を回避できると考えられる。

この証拠として Devine (1989) が行った実験がある。まず研究1では、アメリカの白人大学生を実験参加者とし、黒人に対する文化的ステレオタイプを自由に書き出してもらった。ここでは「研究の目的は、黒人に対する文化的ステレオタイプに関する知識を知るため、あなたの個人的信念について知りたいわけではない」と説明した。また実験参加者の人種偏見の強さを、これとは別に測定しておいた。その結果、白人のほとんどが黒人に対する否定的なステレオタイプを「知識」としてもっており、その知識は被験者自身の偏見の強さとは無関係であったことが示された。このことから Devine (1989) は、偏見の弱い人は非偏見的な価値や平等規範を内面化しており、ステレオタイプが環境によって活性化されたとしても、非偏見的な基準に合わせて、その後の自分の反応を統制できるのだと指摘している。

しかし、Devine (1989, 研究2) では、文化的ステレオタイプを活性化させないようにすることが難しいことが示されている。ここでは、白人の実験参加者に閾下で黒人に関連する刺激を見せるという課題を行った。画面に文字や絵が映し出されても、その投影時間が数ミリ (1/100) 秒といったあまりに短い時間では、人はそれが何であるのかは認識できない。他方で、何を見たかが判断できなくてもその言葉や映像が、意識下で影響を与えることが知られている (Bargh & Pietromonaco, 1982; 池上・川口, 1989; see for reviews, 坂元・森・坂元・高比良, 1999; 下條, 1996)。

Devine(1989, 研究2)はこの閾下刺激を利用して、白人の実験参加者に黒人に関するの刺激(黒人、バスケットボールなど)を閾下提示し、その後で、ある人物の印象を尋ねた。すると白人参加者は、その人物が攻撃的であると判断する傾向にあった。しかも黒人に対する偏見の低い人も、高い人と同様に人物を攻撃的と判断した。この結果は、黒人という対象によって、自動的に「攻撃的」というステレオタイプの知識が活性化してしまい、それが次の人物の印象に反映されてしまったと解釈できる。そして、この傾向は普段は黒人に対して偏見的でない人にも生じた。個人的信念が偏見的でない人も、ステレオタイプが活性化したことに気づかない場合には、相手をステレオタイプ化してしまうのである。

血液型ステレオタイプの意識的統制

坂元(1995)は、血液型ステレオタイプにより選択的な情報使用(Darley & Gross, 1983)が生じるかどうか、その結果として血液型ステレオタイプと合致した印象が形成されるかどうかを検討している。選択的情報使用が生じているのであれば、刺激人物がA型(もしくはB型)であると判断するときには、A型的特徴、B型的特徴のいずれも含まれる刺激人物の行動記述文においてA型情報(もしくはB型情報)に重点的に着目するはずである。結果は、血液型ステレオタイプに基づく選択的情報使用を部分的に支持し、さらには、血液型ステレオタイプに合致した印象評定が行われていた。本研究と関わりのある結果として、血液型性格診断を信奉するか否かの個人差(上瀬・松井, 1991)は、選択的情報使用には影響せず、印象評定にのみ影響を及ぼしていた。血液型性格診断を信奉する人の方が、しない人と比較して血液型ステレオタイプに合致した印象評定を行っていたのである。

坂元(1995)の結果を Devine(1989)に基づき再解釈すると、印象評定はステレオタイプ適用に関わる段階であるため、意識的統制が可能になったのだと考えられる。その一方で、選択的情報使用の側面は、ステレオタイプ活性化とそれに基づく処理の段階と考えられる。そのため、血液型性格診断を信奉しているか否かに関わらず、血液型ステレオタイプに基づく選択的情報使用が生じたのだと考えられる。つまり、意識的統制が困難であったと考えられるのである。

工藤(2003)の研究は、この考えを支持している。血液型性格診断を信奉するか否かの信念は、意識的統制が可能な印象形成や判断において影響を及ぼしていた。つまり、血液型性格診断を信じていなければ、血液型ステレオタイプに合致した印象形成を行わなかったのである。その一方で、意識的統制が困難な選択的情報使用には影響していなかった。血形型性格診断を信じるか否かに関わらず、選択的情報使用が生じていたのである。さらに、血液型性格診断に関する知識量の影響が選択的情報使用において見られた。この知識量は、Devine(1989)が指摘するところの文化的ステレオタイプの有無に相当する。ステレオタイプ活性化の効果は、文化的ステレオタイプが存在する場合にのみみられたと考えられる。

本研究の目的

血液型ステレオタイプは世の中に広く出回ったが、科学的根拠がなく、差別や偏見などにもつながる場合があるので、人々は普段意識的に統制していると考えられる。しかし、Devine(1989)や工藤(2003)に基づけば、自分がステレオタイプの活性化を意識できなければ、偏見に対する考え方に関わらず、ステレオタイプを使ってしまい、ステレオタイプに従った印象形成をしてしまうと考えられる。

本研究では、Devine(1989, 研究2)の研究を血液型ステレオタイプに置き換えて検討する。用いる血液型ステレオタイプはA型とB型のステレオタイプの2つとする。A型とB型の2つを採用した理由としては、第一に、坂元(1995)の研究で、A型とB型のステレオタイプが対比的であるという知見があるからである。第二に、Devine(1989)の研究も白人を被験者として、黒人に対するステレオタイプを記述してもらっているので、血液型も2種類にした方が研究に適していると思われたからである。

これまでの議論から、次のような仮説を導くことができる。血液型性格診断を信奉しているか否かに関わらず、閾下提示による血液型ステレオタイプの活性化により、ステレオタイプに一致した判断が行われやすくなるだろう。具体的には、活性化した血液型ステレオタイプに合致した情報をより多く記憶するだろう。また、ステレオタイプに合致した印象評定を行うだろう。

方法

実験参加者

東京都内の大学に通う女子大学生41名が実験参加した。彼女たちは、心理学の概説講義を受講していたが、調査に関わる内容に関して講義を受けたことはなかった。また、本研究の実験目的に気づいていた実験参加者はいなかった。

手続き

実験室で「認知過程に関する研究」という名目で個別実験を行った。データの取り扱いに関する倫理的配慮の説明を行った後、実験の概要を説明した。実験が、パソコンを使った「知覚課題」と質問紙による「印象形成課題」とからなることを告げた。

はじめにパソコンによる血液型ステレオタイプ情報の闕下呈示を行った。練習試行90秒、本試行を約10分行うことを告げ、+字記号の後、“###”が画面左右のどちらに映ったか、左側に見えた場合にはキーボードの“S”を、右側に見えた場合には“L”を押すように教示した。刺激呈示にはCedrus社の刺激呈示PCソフトSuperLab Pro for Windows Ver. 2.0.4を使用し、Devine(1989, 研究2)に基づいて刺激を作成した。

刺激呈示で用いた単語は予備調査²⁾で抽出されたA型とB型のステレオタイプに関連する対人関係関連語(10個)をもとに、意味を変えずに3文字に統一して使用した。また練習試行と中立条件で使用した単語は性格特性に全く関わらない3文字の単語を使用した。具体的な単語を表1に示す。実験刺激は、まず注視点となる“+”を画面中央に1000ミリ秒呈示した。そのあと、3文字の単語刺激を画面四方のいずれかに20ミリ秒呈示した。そしてその単語刺激の上にマスク刺激として“###”を300ミリ秒呈示し、最後にブランクを2000ミリ~7000ミリ秒間、ランダム呈示した。1回目は練習試行として練習試行用の刺激セットを合計24

回、約90秒間呈示した。そして本試行はA型、B型、中性条件のいずれかのセットを繰り返し、合計96回、約10分間呈示した。

次に、ある人物について書いてある行動記述文(付録1)を配り、そちらを90秒間で読んでもらった。A型的特徴とB型的特徴の両方を含む刺激人物の記述文は、予備調査で抽出された、A型とB型のステレオタイプに関連するネガティブ思考関連語(22個)をもとに、その単語の類義語を組み合わせせて文章を作成した。その際、文章の流れをスムーズにするために、若干の文章の追加を行った。

その後、行動記述文に関する偶発的自由再生を求めた。次に印象評定を求めた。形容詞対は、坂元(1995)に基づく16項目に対し5件法でたずねた。血液型性格診断に関する信念尺度は上瀬・松井(1991)の項目に基づくものを用い、5件法でたずねた。これらは時間を定めなくて回答してもらった。

すべてに回答後、デブリーフィングを行い、実験の説明をした。その際に、課題時に映っていた文字は見えていたかを尋ねた。その結果、本研究では、文字を認識した実験参加者はいなかった。そして、実験参加者からの質問に答え、実験に参加してもらったお礼を渡して、実験を終了した。

結果

血液型性格診断に対する信念尺度は、予備調査の結果に基づき肯定的信念項目と否定的信念項目に分類した³⁾。それぞれの項目平均を算出し、中央値(肯定的信念: $Mdn=2.40$, 否定的信念: $Mdn=3.50$)で高群と低群とを分割した。以下の分析では実験条件と組み合わせ、2(信念: 高・低) × 3(条件: A型・B型・中性)の被験者間2要因による分散分析をそれぞれの信念で実施した。各条件の平均値を表2、表3に示す。

自由再生

A型特徴の正答数に関して2(肯定的信念: 高・低) × 3(条件: A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった($F_s < 1$, ns)。さらに、A型特徴の正答数に関して2(否定的信念: 高・低) × 3(条件: A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。

表1 実験で使用したプライミング刺激

A型条件	B型条件	中性条件	練習試行
陰気な	外向的	博物館	放課後
狭量な	寛大な	受話器	時刻表
内向的	積極的	小学校	自転車
消極的	社交的	大西洋	蛍光灯
内気な	陽気な	八百屋	熱帯魚
A型	B型	赤十字	新幹線

表2 肯定的信念×呈示刺激の各条件別にみた平均値と標準偏差

肯定的信念 条件	高群			低群		
	A型	B型	中性	A型	B型	中性
正再生数						
A型特徴	2.17(.98)	2.67(.82)	1.00(.82)	2.25(1.39)	2.50(.54)	2.56(.88)
B型特徴	2.17(1.17)	2.33(.82)	2.50(.58)	1.88(1.36)	3.63(.75)	2.78(.97)
中性特徴	6.00(2.10)	5.00(.63)	5.00(.82)	4.63(1.30)	5.75(2.61)	5.67(1.50)
印象評定						
対人関係	2.47(.52)	1.93(.35)	2.30(.48)	2.23(.38)	2.13(.34)	2.31(.78)
ネガティブ思考	2.65(.32)	2.92(.16)	2.98(.34)	2.84(.32)	2.75(.39)	2.72(.37)

註) カッコの中は標準偏差。

表3 否定的信念×呈示刺激の各条件別にみた平均値と標準偏差

否定的信念 条件	高群			低群		
	A型	B型	中性	A型	B型	中性
正再生数						
A型特徴	2.83(1.17)	2.40(.55)	2.57(.98)	1.75(1.04)	2.75(.71)	2.17(.75)
B型特徴	2.00(.89)	3.60(.89)	2.43(.79)	2.00(1.51)	2.63(.92)	3.00(.89)
中性特徴	5.33(1.75)	6.20(3.27)	5.86(1.46)	5.13(1.89)	4.88(.64)	5.00(1.10)
印象評定						
対人関係	2.07(.39)	2.12(.44)	2.03(.29)	2.53(.39)	1.96(.31)	2.63(.88)
ネガティブ思考	2.80(.31)	2.67(.25)	2.77(.43)	2.73(.35)	3.00(.21)	2.83(.32)

註) カッコの中は標準偏差。

その結果、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった ($F_s < 2.06$, ns)。

B型特徴の正答数に関して2(肯定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、条件の有意に近い主効果がみられた ($F(2, 35) = 3.18$, $p = .054$)。A型条件 ($M = 2.00$) や中性条件 ($M = 2.69$) よりもB型条件 ($M = 3.07$) のほうが、B型正答が高い傾向にあった。肯定的信念の主効果 ($F(1, 35) = 1.71$, ns) ならびに交互作用効果 ($F(2, 35) = 2.17$, ns) はみられなかった。さらに、B型特徴の正答数に関して2(否定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、条件の主効果がみられた ($F(2, 34) = 3.85$, $p < .05$)。A型条件 ($M = 2.00$) や中性条件 ($M = 2.69$) よりもB型条件 ($M = 3.00$) のほうが、B型正答が高かった。否定的信念の主効果 ($F < 1$, ns) ならびに交互作用効果 ($F(2, 34) = 1.78$, ns) はみられなかった。

中性特徴の正答数に関して、2(肯定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった ($F_s < 1.64$, ns)。さらに、中性正答数に関して、2(肯定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった ($F_s < 2.01$, ns)。

印象評定

予備調査の結果に基づき、対人関係因子に強く関わる項目5項目を平均し、対人関係因子の得点を算出した。また、ネガティブ思考因子に強く関わる項目11項目を平均し、ネガティブ思考因子の得点を算出した。これらは、A型特徴が当てはまると回答しているほど、得点が高くなるように評定を逆転した。

対人関係因子に関して、2(肯定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった ($F_s < 1.51$, ns)。さらに、対人関係因子に関して、2(否定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、否定的信念の有意に近い主効果がみられた ($F(1, 34) = 4.05$, $p = .052$)。低群 ($M = 2.35$) が高群 ($M = 2.07$) よりも得点が高かった⁴⁾。条件の主効果 ($F(2, 34) = 1.34$, ns) ならびに交互作用効果 ($F(2, 34) = 2.21$, ns) はみられなかった。

ネガティブ思考因子に関して、2(肯定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行った。その結果、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった ($F_s < 1.67$, ns)。同様に、2(否定的信念：高・低)×3(条件：A型・B型・中性)の被験者間2要因配置の分散分析を行ったが、いかなる主効果ならびに交互作用効果もみられなかった ($F_s < 1.31$, ns)。

考 察

血液型ステレオタイプ刺激の閾下呈示効果

行動記述文の自由再生において、B型ステレオタイプ刺激を閾下呈示した場合、A型ステレオタイプ刺激や中性刺激を閾下呈示した場合と比較して、B型的な特徴の正再生数が高かった。これは、血液型ステレオタイプが活性化し、このステレオタイプと合致した情報を選択的に使用した結果だと考えられる。この結果は仮説を一部支持した。

しかし、A型的特徴や中性的特徴においてはこのような閾下呈示の効果は認められなかった。これには、行動記述文における記憶しやすさが、A型的特徴、B型的特徴、中性的特徴で同一でなかった可能性が考えられる。B型的特徴は、他の特徴と比較して否定的な意味合いで捉えやすいものだった。対人認知におけるネガティビティ・バイアスの存在を考えると、A型的特徴や中性的特徴は、B型的特徴よりも記憶が困難であり、ステレオタイプ活性化の効果が現れにくかったのかもしれない。

上記のような選択的情報使用に対する閾下呈示の効果は、血液型性格診断を信奉していても、していなくても、同様に生じた。血液型性格診断を信じていない人は、血液型に基づいて人を判断しないように意識的統制の努力をするかもしれない。しかし、血液型ステレオタイプが無意識下で活性化した場合には、意識的統制がおよばないと考えられる。本研究におけるステレオタイプ刺激は閾下で呈示したので、血液型ステレオタイプの活性化を意識することは困難だっただろう。そのため、血液型性格診断を信じていない人においてもアクセシビリティ効果が生じたのだと考えられる。さらには、選択的情報使用には意識的統制が働きづらいつけられる(工藤, 2003)。このことも、血液型性格診断を信じていない人でアクセシビリティ効果を生じやすくさせたと考えられる。

印象形成においては、血液型ステレオタイプの閾下呈示の影響は全く見られなかった。先行研究(Bargh & Pietromonaco, 1982; Devine, 1989)に基づけば、印象形成においてもアクセシビリティ効果がみられたはずである。本研究でアクセシビリティ効果が見られなかった理由として、血液型ステレオタイプ刺激の閾下呈示の効果サイズが小さかった可能性が考えられる。選択的情報使用に

おいても閾下呈示効果は一部でしか認められていなかった。この結果の解釈可能性として、先述のような行動記述文における記憶しやすさの問題があげられる一方で、血液型ステレオタイプ刺激の閾下呈示の効果が微少であった可能性も考えられる。先行研究(Bargh & Pietromonaco, 1982; Devine, 1989)のように曖昧な行動で多義的な行動記述文を使用した場合と異なり、本研究では、A型的特徴とB型的特徴を混在させることで多義的な行動記述文を作成した。このような場合、そもそも選択的情報使用が生じなければ印象評定に血液型ステレオタイプの閾下呈示効果は生じづらいつけられる。このため、印象形成において明瞭な効果が認められなかったのだろう。本研究と異なり、曖昧な行動が羅列された行動記述文を用いければ、血液型ステレオタイプの閾下呈示効果が生じるかもしれない。今後の検討が必要である。

本研究の意義と制限

本研究は、部分的であるが血液型ステレオタイプに合致した刺激が閾下呈示されることで、選択的情報使用が生じることを示した。そしてこの効果は、血液型性格診断を信じるかどうかに関わらず生じた。この知見は、Devine(1989)の分離モデル(dissociation model)と合致するものである。この分離モデルに基づくことで、本研究から血液型性格診断の問題点を指摘することができるかもしれない。

日本独特のステレオタイプである血液型ステレオタイプは、マスコミュニケーションや日常的対面状況を通じて流布しており、多くの人が「知識」もしくは文化的ステレオタイプとして保持していると考えられる。その一方で、血液型性格診断が根拠のないものであることも啓発されており、血液型性格診断を信用しないと考える人も増えてきた。このような人たちは、意識的に統制することによって、血液型に基づき人を判断しないよう努力するだろうと期待できる。

しかし、血液型ステレオタイプを知識として保持している限り、意識的統制には限界がある。本研究のように血液型ステレオタイプを無意識下で活性化された場合には、意識的統制ができずに、ステレオタイプの判断をしてしまう可能性があるのである。根拠のない知識に基づくことで誤った印象を形成することは、後の対人関係に否定的に働くと考えられる。

本研究には制限もある。まず実験参加者数の少なさがあげられる。そのため、本研究の結果が安定しなかったり、検出力が低かったりした可能性がある。この問題に対処するために、肯定的信念、否定的信念を平均を用いて中心化し、実験条件をダミー変数化した上で、交互作用項を作成し、階層的重回帰分析を実施した。こうすることでサンプル数の少なさを補うことができると考えた。この分析の結果は、先述の分散分析の結果とほぼ同様であった。その意味では実験参加者の少なさの問題は大きくないと考えられるが、今後追試をすることで結果を確定することも必要だろう。

次に、血液型ステレオタイプに外顕的特徴がないことに由来する制限もある。例えば、人種ステレオタイプの場合、黒人は独自の文化（例、ジャズ、ブルース）を形成しており、それらを外顕的な特徴とすることができる。ステレオタイプ刺激を閾下呈示する際、これらの外顕的特徴を刺激とし、後の対人認知、判断において性格特性に対するアクセシビリティ効果を検討することが可能となる。外顕的特徴と性格特性とは必ずしも対応しないと考えられるので、実験結果から、黒人ステレオタイプが活性化し、それと関連する性格特性のアクセシビリティが高まったと判断する妥当性は高いと考えられる。

一方で、血液型ステレオタイプには外顕的特徴がない。A型やB型の人独自の文化や行動習慣を形成しているとは考えづらいし、外見に特徴が存在するわけでもない。そのため、本研究では、血液型ステレオタイプにおける性格特徴が2因子構造であることを利用し、一方の因子を閾下呈示する刺激の特徴とし、もう一方の因子を対人認知判断で使用する性格特性とした。このような手続きでステレオタイプ活性化の効果を主張するためには、血液型ステレオタイプにおける二つの性格特徴が互いに独立である必要がある。もし関連性が考えられる場合、そこで得られたアクセシビリティ効果は、ステレオタイプによるものではなく、ある特定の特性概念によるものであるという代替説明を生むことになる。本研究では、二つの性格特徴が互いに独立であるという保証はない。その意味で、Devine(1989)の分離モデル(dissociation model)を支持したとは、(結果の部分的支持という点を除いても)断言できない側面がある。今後の検討が必要である。

註

- 1) 本研究は、第二著者の指導のもと、第一著者が平成18年度に昭和女子大学人間社会学部に提出した卒業論文の一部を再分析したものである。
- 2) 予備調査は、実験参加者と同一のサンプル143名に対し質問紙調査を行った。坂元(1995)のA型的特徴とB型的特徴を両極とする形容詞16項目に対し、実験参加者と同世代の学生がA型もしくはB型の人にあてはまると思う度合について回答を求めた。因子分析(主因子法・プロマックス回転)の結果、「慎重な—慎重でない」「まじめな—まじめでない」「神経質な—神経質でない」「楽天的でない—楽天的な」といった項目に強く負荷するネガティブ思考因子と、「非社交的な—社交的な」「内向的な—外向的な」といった項目に強く負荷する対人関係因子との2因子解が得られた。刺激作成ならびに印象評定の形容詞対にはこの結果に基づく分類を利用した。
- 3) 上瀬・松井(1991)では、「ステレオタイプの有無」「理論的信念」「経験的信念」の下位尺度からなるとされていたが、予備調査データを因子分析した結果は、3因子解を支持せず、信頼性も乏しいものであった。予備調査データからは、「血液型性格診断は信用できる」といった肯定項目に強く負荷する肯定的信念因子と「人の性格は血液型による4タイプに分けられないと思う」といった否定項目に強く負荷する否定的信念因子からなる2因子解が認められた。別サンプルの結果(岡部, 2006)からも2因子解が得られていることから、本研究でも2因子解をもとに検討を進めることとした。
- 4) この結果は、血液型性格診断を信用する人の方がしていない人と比較して、ターゲット人物を対人関係上、社交的で外向的だと認識したことを示している。予想外のこの結果は本研究の主たる目的と関連しないのでこれ以上の考察は行わないこととした。

引用文献

- Bargh, J. A., & Pietromonaco, P. (1982). Automatic information processing and social perception: The influence of trait information presented outside of conscious awareness of impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 437-449.
- Darley, J., & Gross, P. (1983). A hypothesis-confirming bias in labeling effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 20-33.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 680-690.
- 池上知子・川口潤 (1989). 敵意語・有効語の意識的・無意識的処理が他者のパーソナリティ評価に及ぼす効果. *心理学研究*, **60**, 38-44.
- 上瀬由美子・松井豊 (1991). 血液型ステレオタイプの機能と感情的側面. *日本社会心理学会第32回大会発表論文集* pp. 106-107.
- 工藤恵理子 (2003). 対人認知過程における血液型ステレオタイプの影響: 血液型信念に影響されるものは何か. *実験社会心理学研究*, **43**, 1-21.
- 岡部美紀 (2006). 血液型性格診断に対する信念が印象形成の期待に及ぼす影響. 平成17年度昭和女子大学人間社会学部卒業論文 (未公開)
- 坂元章 (1995). 血液型ステレオタイプによる選択的な情報使用: 女子大学生に対する2つの実験. *実験社会心理学研究*, **35**, 35-48.
- 坂元章・森津太子・坂元桂・高比良美詠子(編) (1999). サプリミナル効果の科学: 無意識の世界では何が起きているか. 学文社
- 佐藤達哉 (1994). ブラッドタイプ・ハラスメント: あるいは AB の悲劇. *現代のエスプリ*, **324**, 154-160.
- 下條信輔 (1996). サプリミナル・マインド: 潜在的人間観のゆくえ. 中央公論社
- Srull, T., & Wyer, R. S., Jr. (1979). The role of category accessibility in the interpretation of information about persons: Some determinants and implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1660-1672.
- 詫摩武俊・松井豊 (1985). 血液型ステレオタイプについて. *人文学報* (東京都立大学人文学部), **172**, 15-30.

(しのざき ひろみ 心理学科生)

(ふじしま よしつぐ 生活機構研究科)

付 録

付録1 実験に使用した刺激文

彼女は20歳の女子大学生です。彼女は実家暮らしで、学校へは電車で通っています。彼女は授業ではいつも真剣にノートをとっています。しかし、あまり興味のない授業は休みがちです。友達同士で遊びに行く時には、皆の行きたいところを尊重して行動します。彼女は人とは違う独特な服を好みます。サークルにも所属していて、彼女は相手のことを考えて接することができるので、先輩からも後輩からも慕われます。時々イベントなどの幹事を任されますが、自分の意見を押し通そうとする面もあります。バイトでは、一つ一つの作業を丁寧に進めます。集中力がなくなると、いい加減に進めてしまうので、先輩に怒られたりします。そうすると、一日中落ち込んでしまい、そのことしか考えられなくなります。彼女は将来、公務員になるという夢があります。彼女の廻りは卒業後の進路を考えていますが、その点彼女はのん気なので、あまり気にしていません。彼女は時々興奮気味に物事を言ってしまうので、友達と喧嘩になります。しかし、そのことをいつまでも気にしてしまうという面があります。彼女は車を運転する時、しばしばスピード違反をするという軽はずみな行動も見られます。彼女は甘いものが好きです。そして家では犬を飼っています。家族は4人です。家はマンションです。

註) 実線はA型的特徴、波線はB型的特徴、破線は中性的特徴を示す。